



理論と教育実践のバランスのとれた 英語教師の育成を目指して

文学部 秋山 朝康



文教大学教育学部中等教育英語専攻を卒業後、東京都中学・高校英語教師として在職する。その間、通算8年間アメリカ・オーストラリアに留学し、メルボルン大学にて応用言語学分野で博士号を取得。2004年、母校に着任。主な研究分野は言語テスト（特にスピーキングテストや教員採用試験の2次試験）・動機づけ・英語学習者の自律性について。大学では主に英語教育学関係に関する講座を担当している。文教生は後輩なので必要以上に熱がはいってしまいがちである。学生時代、野球部で「文教野球部魂」で鍛えられた影響からであろうか。（あきやま・ともやす）

大学の授業の内容で私が常に意識していることは理論と実践の有機的融合を念頭に授業を進めることである。英語教育学関係の授業ではこの二つは飛行機の両翼のようなもので、どちらが欠けても十分ではないと思う。応用言語学研究から得られる示唆を教育現場にどのように活かすことができるか意識していかなければならない。またその逆も当てはまると思う。理論と教育実践のバランスのとれた英語教師の育成を目指している

はじめに

私の授業スタイルとしては、「タスク型グループ学習」を多用していることである。まずは学生にとって面白そうで、チャレンジな課題（タスク）を課す。そして、タスクは協働しないと達成できないような課題にする。つまり、それぞれが自分の学習に責任を持ちながら相互に成長するように仕掛けをする。これは学生を「動機づける」と「自律ある学習者に育てる」ことを目標としている。英語教育学に興味を持って、授業以外でも自分で目標に向けて自律的に勉強できるようになればこちらの意図は達成される。受講生は英語教師を目指している学生が多いので動機づけは比較的問題はないのであるが、その動

機を維持していくことの方が難しい。そのため放課後や空き時間を使って積極的にコミュニケーションをとるように心掛けている。

私の役目は、野球で言えば、学生は選手、私はコーチに徹することである。過去の留学経験から「人は追い込まれた時に思いもよらない力を発揮する」と「鍛えれば鍛えるほど学生は力がつく」、を信じて日々鬼コーチに徹している。

1. 英語教育学Ⅰ&Ⅱ（2年生対象）

この授業の位置づけは英語教育学の入門としている。受講生は主に2年生である。受講者数の平均は60人前後である。使用しているテキストは土屋・広野先生著の『新英語科教育法入門』である。

そのまま基本的な知識を得るために学生にはテキストを読むように指導している。授業で理論や問題点など議論をし、さらに理解を深めることを目的としている。授業のスタイルは初めのオリエンテーションの時に4-5人くらいのグループ分けをする。60人だと12~15グループができることになる。そして、グループ毎に、テキストで学習するトピックについて文献20冊以上を読んでまとめ、自分たちの意見を発表する形式をとっている。大切なのは自分たちがグループで様々な文献を探して発表の資料を作成するとき意見交換することである。そのことで様々な意見を持っている人が存在することを実感する。このような体験が今の学生には必要であると思う。教師になれば意見が食い違う人と議論していかなければならない。またグループをまとめていく過程で教師に必要なリーダーシップも培われていくと考えている。

2. 英語演習Ⅲ（3年生対象）

英文科のカリキュラムは3年生から学生の進路や興味に応じて専門の授業が受講できるようになっている。そのためであろうか、この授業は動機の高い学生が集まる。授業数は30回前後で目標は英語のコミュニケーション能力をつけることと、卒業論文作成の疑似体験を学習することである。受講生は平均20名~40名前後である。「この授業を受講すると夜も寝られない日々が続く。」という噂が学生の間に広まり、最近受講生が減りつつある。

上記の授業の目標に照らし合わせて、前半の内容は教授法について英語で書かれた原書を徹底的に読む。そして読んだことを基礎として中学校の英語授業を実践してもらおう。ここでは特に理論と実践を融合するように気をつけている。理論ばかりに偏らず、また実践だけに気を配ることなく学生を指導するよう気をつけている。伝統的な訳読式の授業を受けてきたことが多い学生にとって、今までにあまり受けてきていない授業を自分たちが創り出すことは学生には非常に新鮮に感じるら

しい。

後半は卒業研究論文の疑似体験である。英語教育の中で自分の興味のあるトピックを決め（小学校英語教育についての諸問題、センター試験リスニングテストの波及効果等々）、そのトピックに関して先行研究を調べて、そこから浮かびあがる問題を考察する。パワーポイントを用いて英語で発表する。

最後にこの授業での名物？は英問英答の中間テストである。多くの学生はテスト当日のかなり前から準備している。一夜漬けでは間に合わない。当日は、試験開始から学生は鉛筆が止まることなく最後まで鉛筆が動き続ける。学生いわく「テストで腱鞘炎になってしまいます」。一生懸命やっている学生を見て私は素直に毎年感動する。初めは「無理！」と言っていた学生が着実にこなしている頑張りには驚く場面である。「人は追い込まれた時に思いもよらない力を発揮する」と確信する瞬間でもある。

3. 英語教育学特別講義Ⅱ：言語テスト（3年生対象）

教師は教えることは最も大切なことであるが、生徒を評価することはそれと同じくらい大切なことである、とは私の信念の一つである。教えてそのままでは教師の役目を果たしているとは言えない。日本の英語教育はどのように効率的に教えるかの教授法のテクニックのほうに注目がいき過ぎ、評価する方法はあまり教えられてないのが実情である。現場の英語教師で評価やテストの授業を大学生時代受講した方はあまりいらっしやらないと思う。

授業の中身はテストの理論ばかりでは退屈かつわかりにくいので実在するテスト（TOEFL, TOEIC, 英検、大学入試等）を通して言語テストを学ぶよう試みている。週2コマで30回弱の授業回数である。テキストは testing for language teachers を使用している。まず、15回かけて、グループがリードし、割り当てられた章を説明する。残りの授業は実際に中学・高等学校で使っている教科書を用いて中

間テストを作成してもらおう。作成するときにもグループ活動をする。課題としては今までに受けたことがない communicative tests を作成すること。学生は「communicative とは何？」とか「今までに受けたことがないテストって？」を考え続ける。時間がかかる作業である。放課後や週末を利用して時間がない。グループの友人宅に泊まり込みをしてやっとのことで完成する。それをクラスの前で発表する。作成されたテストを前半で学習した知識を元に他のグループが作ったテストを建設的に批判する。作成過程で他の人の言語観に触れさらに自分の言語観の振り返りをする。

残りの授業はテスト分析の演習や巷に蔓延している“悪い問題”をみつけ討論する。定期テストではこちらも悪い問題を出題しないように気をつけたいといけない。自分で自分の首を締め付けないようにしてはならないと肝に銘じる。

4. 英語教科法 I & II (教職希望者対象)

おそらく最も学生が神経をとがらす科目の一つであろう。この単位を取得できないと教育実習に行くことはできなくなってしまう可能性が大であり、結局は教員免許を取れないことになってしまうからである。使用テキストは少々受講生には難しいかと思うのだが、英米の大学院でも使用されている Harmer, J. (2001). *The practice of English language teaching* (3rd edition). Longman である。勿論、授業ですべての内容をカバーすることは無理なので、学生に特に関係があるものを数章ピックアップしてテキストとして使用している。例えば Communicative Language Teaching (CLT) や Task-based Language Teaching (TBLT) など、現在の学習指導要領のもとになっているものや、実際の学校現場でも使用できそうなものを選んでいく。ここでも理論と実践を兼ね合わせて授業を構成している。現場ではなかなか理論を学ぶことは時間的・物理的制約があり困難である。多少、難しい内容で(学生から悲鳴が)あっても、

それは理論に裏付けられた指導案を作成し授業を展開してほしいという私の願いでもある。

実践面では模擬授業を取り入れている。ただし、受講生は約 50 名くらいなので模擬授業をするにしても一人あたりの時間があまりとれない。ペアやグループで模擬授業せざるをえない現実的な問題がある。週一回の授業では足りないと感じている。

この授業には学生も授業担当者も苦渋の選択を強いられる時期が毎年やってくる。「文教大学」という看板を背負って教育実習で教えるから最低限知っておかなければならない知識や技術を身につけていない学生や、教える熱意に欠けている学生は残念ながら諦めていただかなければならない。そのような意味で、成績を出すときには、私は、毎年厳しい選択に迫られている。

5. 卒業研究 I & II (ゼミ)

どの学校種でも担任を持つのは嬉しい。大学に赴任する前までは中学・高校の生徒のように生徒が慕ってくれる関係はないだろうと寂しく思っていた。しかし、予想に反してゼミ生とは熱い関係ができて非常に嬉しい。ゼミに入ってくれる学生は素直で一生懸命やってくれる学生ばかりで幸せである。

論文指導で一番難しいのは卒業論文のテーマの選択である。学生をみると受講している授業で学習したトピックに影響されて 1 年では到底終わりそうにないトピックを選んでしまう傾向にある。ここでの私の役割は灯台や管制塔である。なるべく学生の興味に合い研究可能なトピックを導くようにしている。4 年の 4 月 - 5 月頃、トピックが決まったと思ったら、6 月頃に教育実習があつて 7 月には教員採用試験があるためになかなか論文にたいして十分な時間が取れない。教育実習中にアンケートなど実施したい学生などは実習前にアンケートを作成しなければならない。このような短期間の指導でアンケート作成は難しいとわかっていても時間の制約上、止むを得ない。そのため、ゼミの授業は勿論、週末などを利用して指導することが多い。時間数

が少ないことを補うために、さらに夏休みに課題をだしてそこで時間のなさを補うようにしている。

前期の大まかな目標としては、1章(研究の目的) & 2章(先行研究)のある程度の完成を目指す。夏休みで3章(研究方法) & 4章(結果)の完成を目指す。後期は5章(考察) & 6章(結論)を終えて、1月の卒論発表会に向けて完成させるように指導している。学生は一年間休む暇もないようである。「研究者の卵まで育てたい」ということから、中途半端なことはしたくない。何故なら、教育現場で教えているときでさえも常に自分を客観的に分析する姿勢が必要であると思うからである。論文作成の過程でそのような姿勢を育てるように指導しているつもりである。



(昨年度卒論ゼミ発表会にて：卒論を完成した頃の充実した表情)

毎年私はゼミ生に目標を建てて臨んでいる。その目標は常に前年度の先輩を越えることである。前年度の先輩の素晴らしかったところを紹介し(例えば昨年度は卒業論文の他に「メイキング論文」と称して後輩のために自主映画を作った)、「君たちは何ができるか」というように、自分たちで考えさせるようにしている。また、ゼミ内には有志による様々な勉強会が存在することも特徴であろう。例えば、教育実習前には模擬授業研究会、教員採用試験前には面接研究会、卒論発表前にはプレゼンテーションの研究会ができて自分たちで活動している。知らず知らずのうちにゼミの皆が吸い込まれるように参加して結局は

ゼミの全員になってしまう。このような姿をみると「ついに自律ある学習者が発芽した。」と、私は卒業式に自己満足と美味しくも寂しい酒に毎年浸っている。



(今年度のゼミの最初の飲み会4月頃：皆顔が若い)

終わりに

今の学生は私が学生だった時よりも格段に忙しいと思う。授業は勿論、サークル、アルバイト、補助教員、ボランティア、数々のオリエンテーションや〇〇ゼミへの出席など教えたらしきがない。そんな中で、私の授業を受講してくれて一生懸命励んでくれた学生には心から感謝している。

いくつかの授業で「こんなに勉強したのは生まれて初めてですよ」とか「この授業をとって良かったです」と言う学生がいる。私にとっては最高の褒め言葉である。ただ、実際に彼ら・彼女らの「力」になっているかは検証の必要がある。これからもりっぱな英語教師が巣立っていってくれば望外の幸せである。また何年後かにこのような機会を与えてくださった時に、果たして私は自分の授業が少しでも良くなっていると実感できるのだろうか。そのためには、私自身が英語教育実践と研究のバランスのとれた教師に成長することが最低条件になると考えている。